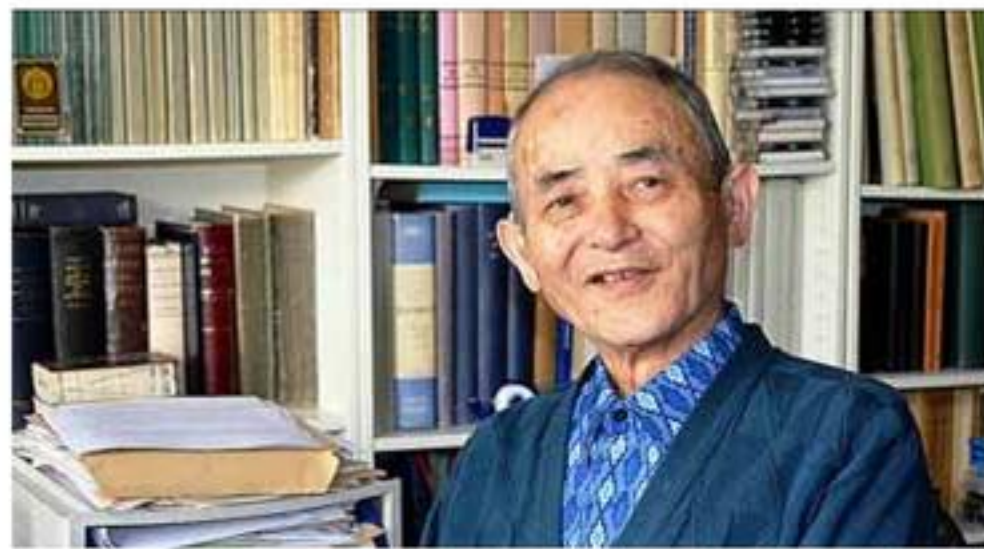


ひと

日本の戦争責任を見つめるライデン大学名誉教授

むらおか たかみつ
村岡 崇光 さん(76)

チューリップと風車の国・オランダは、日本と友好関係の深い国だと思っていた。

1991年、ライデン大に赴任し、違う現実と直面する。同僚はどこかよそよそしく、オランダを訪ねた海部俊樹首相が慰霊碑に供えた花束が池に捨てられる事件も起きた。調べると、オランダの植民地だったインドネシアで日本軍

による非道な扱いを受けた元捕虜や民間抑留者が多数いた。日本に補償を求める動きもあった。社会には反日感情が渦巻いていた。

本や資料を読みあさり、2000年に「日蘭対話の会」を始めた。インドネシア帰りのオランダ人と日本人が太平洋戦争とその後

の歴史への理解を深めるため、過酷な抑留所生活、泰緬鉄道建設工事などについて語り合ってきた。鹿兒島県育ち。英語が好きで旧東京教育大に進み、イスラエルに留学。ヘブライ語の専門家として英、豪、オランダと渡り歩いた。

日本を離れて半世紀、国籍は日本のままだ。「日本が過去の負の遺産を正視し、誠実に行動するまで日本人である覚悟」と言う。

退職した03年以降は毎年、日本が侵略・占領したアジアの大学などで5週間、無償で教壇に立つ。

「対話の会の学びから、口先の謝罪ではなく、心を行動に表すべきだと思ったのです」。戦後70年の来年はその講義の内容と各国の報告をまとめ、日英両語で出版する計画だ。

文・写真 大久保真紀